



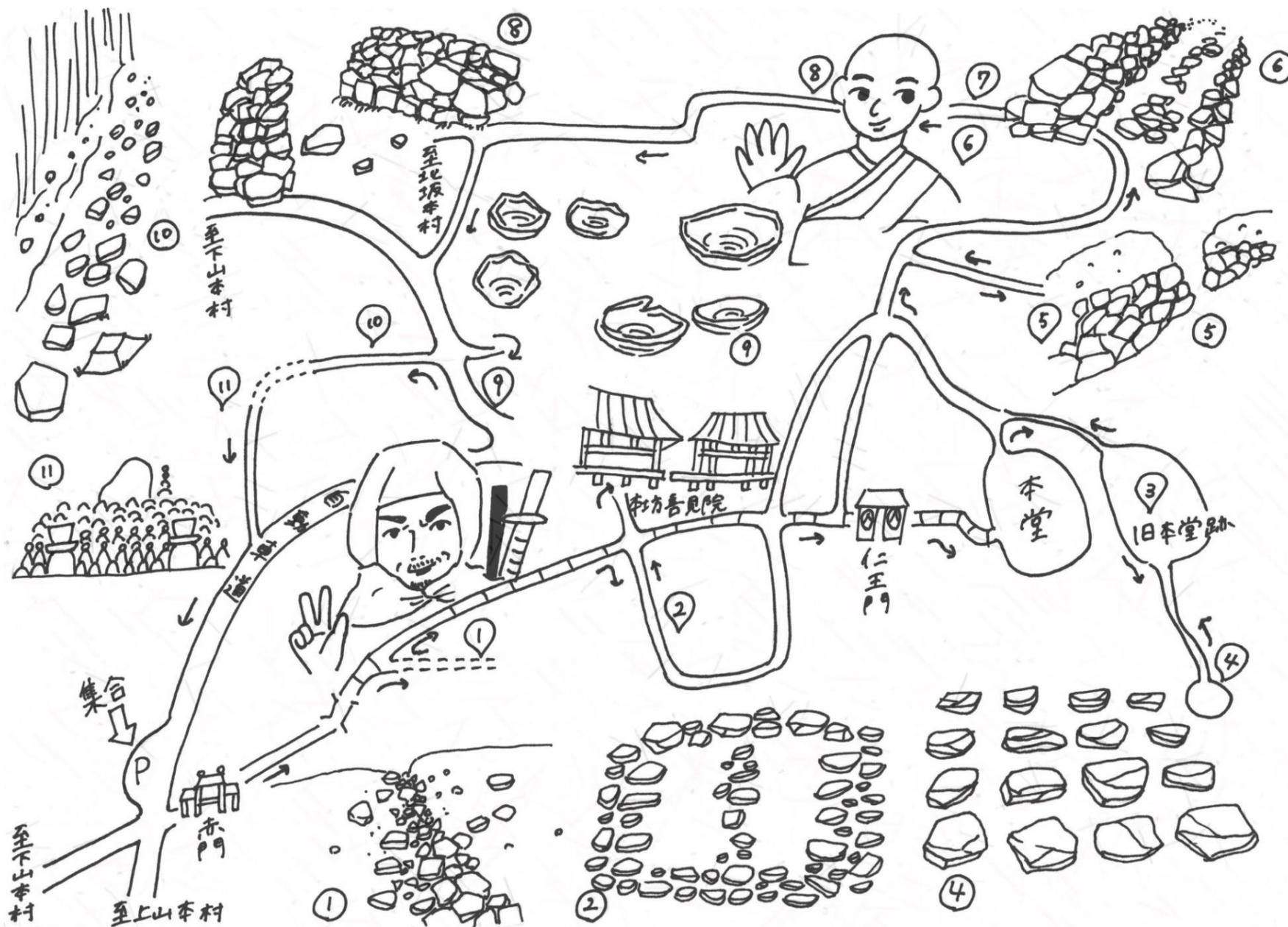
番外 2

湖東三山百済寺と歩んだ集落群 百済寺郷

— 垣間見る 寺と暮らした一千有余年の歴史 —

中世百済寺の興隆と繁栄の面影を求めての巻

聖徳太子創建と伝わる百済寺は、中世、「東の叡山」とも称されるほど隆盛を極めました。その繁栄の一端を支えたのが、百済寺郷といわれる大萩・上山本・下山本・北古屋・北坂本の五ヶ村です。明治から平成までは、百済寺甲・乙・丙・丁・戊と呼ばれていました。今も伝わる伝統行事や文化遺産から、百済寺とともにあった百済寺郷の人々の暮らしや歴史を紹介します。



①中世の参道

織田信長の焼き討ちから、80年近くの年月を経て百済寺は復興しました。慶安3年(1650)本堂・仁王門・山門が完成しました。

今の参道も、この間の工事で付け替えられたものです。かつての参道が山中に残っています。よく見ると、両側に石垣をもつ石段が遺っています。

②坊跡ユニット

現在確認されている坊跡は、約200ヶ所に及びます。おそらく周辺には、もっと存在していると思われます。

IV-18とされた坊跡は、平成7年発掘調査されました。その結果、礎石建物・井戸・水路・石組水利施設が見つかりました。この遺構の組み合わせは、坊跡の基本だろうと考えられます。

③旧本堂跡

現本堂の北東、10m余の高所に平坦地があります。焼き討ち前の本堂が、ここにあったと伝わっています。その規模は、現本堂よりも一回り大きな七間四方の規模を持っていたとも…

現状では、その存在を示すものはありません。切り込まれた溝は、現本堂への水被害を防ぐためのものです。

④五重塔跡

百済寺の遺構で、最も高所にあります。16個、すべての礎石がのこっています。表面には火災を物語る痕跡があり、焼失した塔の柱は、直径40cm前後であったことがわかります。

北西約8mの所には、別の心礎らしい石材があります。さらに以前の五重塔に使用されていたものでしょうか。

⑤土塁囲みの坊跡

裾を石垣で補強した土塁が、坊跡を囲んでいます。このような構造も持つ坊跡は、ここだけです。

奥にあたる東側が、一段高くなっています。ここに、礎石建の建物がありました。西側の部分には、向拝のような施設も見られます。段差の部分には石段もあり、仏堂のような感じがします。

⑥石畳道の坊跡

道路跡から南に入ると、東側には石垣が、西側には石列があります。そして、中央部分は石畳の道となっています。百済寺の坊跡の中でも、念入り造られている印象があります。

中央と北寄りに、「く」の字形の段差が見られます。建物に伴う遺構であると考えられます。

⑦築山庭園を持つ坊跡

進入口の左手には、長さ5mにわたって土盛遺構があります。土盛越しの南西隅には、土坑と土盛、大型石材がみられます。これらの構造物は、築山を配した庭園遺構である可能性があります。

また、中央付近には3m四方、その南西には1m四方の石組み遺構がみられます。

⑧北古屋道

クランクする部分を持ちながら、北西から南東に登る参道です。両側には、25~30m四方の、比較的均等な規模の坊跡が整然と並んでいます。

東側の石垣は、高さ4mに及びものもあります。全体に、他の区域よりも整っている感じがします。この部分が、かつての主参道だとの言い伝えも…

⑩中世墓1

百済寺山中には、多くの石造物が眠っています。五輪塔であったり、お地蔵さんであったりします。特に集中して認められるところは、中世墓に間違いのないでしょう。

ご案内の尾根筋には、数多くの石造物が散在しています。かなり大規模な中世墓があるのは確実です。

⑪中世墓2

明治初年、廃村となったのが籠村です。百済寺とは、物心とも最も距離の近かった集落です。中世墓の区域に人々の生活があり、水田耕作などに伴い多くの石造物が出土しました。

籠村の存在を記憶するため、石造物が一同に集められ供養されています。今も付近には、石造物が顔を覗かせています。

⑨百済寺樽製造遺構？

発掘調査で、6個もの大型甕が出土したところでした。備前焼が3個、常滑焼が3個です。底の部分の地中に埋めて、複数の大型甕を据えた遺構は、一般的に醸造用・貯蔵用と考えられています。

室町期、百済寺醸造の酒は都でも評判でした。甕の時期とも一致し、ひょっとすると、酒醸造跡かもしれません。